令和4年度第2回宮崎県読書活動推進委員会議事録：令和4年11月10日(木)県立図書館

出席：竹内委員長、大賀委員、相良委員、田中委員、福永委員（元長委員の代理）、中山委員、
井澤委員、内瀬委員、小島委員、小坂委員、成合委員、森山委員、矢野委員、吉永委員。
県生涯学習課職員（猪野補佐、中村主幹、後藤、日高、武田）

発言者	発　言　内　容
説明：読書バリアフリー法に係る「宮崎県生涯読書活動推進」一部改定案について	※進行：竹内委員長
吉永委員	管理指標について。県立図書館の利用数のみを、県の指標として取り扱うことは適切ではない。
田中委員	賛成。
矢野委員	図書館職員の研修などのように、読書環境の整備に直結するものが望ましい。
大賀委員	音訳ボランティア養成など、より具体的な取組になるとよい。
田中委員	研修には、公共図書館だけでなく、学校図書館の職員も含めてほしい。
竹内委員長	目標値、指標を合わせて検討するとよいのではないか。

ＡとＢの２班に分かれて、協議を行った。
Ａ班は、竹内委員長、大賀委員、相良委員、田中委員、福永委員、中山委員。
生涯学習課職員 武田、後藤。

発言者	発　言　内　容
A班　協議Ｉ：読書バリアフリー計画に係る読書活動推進について	※進行：竹内委員長
竹内委員長	明星視覚支援学校の図書室が改装中。整備ではなく、利用者のニーズ把握などデータ分析が必要。学校図書館も同様に、入学予定者など事前のニーズ把握などが大切。
相良委員	進学校である高等学校の図書室だが、大型絵本３セットがある。周知すること、職員が知ることが大切。
田中委員	職員の資質向上に向けた取組が遅すぎると感じる。県独自に「障がい者」という言葉を使ってもよいのではないか。
中山委員	学校図書館祭りなど実施している。今後、読書でＩＣＴ（タブレット）をうまく活用できないか考えている。
大賀委員	点字図書館と公共図書館が互いに連携していない。
福永委員	障がい理解に対する基本的な研修を実施していく必要がある。
田中委員	実践した上で、データを分析していく必要がある。デイジー図書の体験会などを実施してほしい。
竹内委員	研修内容をよく吟味する必要がある。講話中心は、知識や体験を得られる。体験活動を中心とした体験参加型がある。明星視覚支援学校の取組など参考にできる。
田中委員	障がい当事者の保護者も含めた人材育成を行っていくとよいのでは。
A班　協議２：生涯読書活動推進計画の具現化に向けて	※進行：竹内委員長
竹内委員長	親子がセットになっていることが気になる。レスパイトの側面から考えても、子供だけで

	もいいのではないか。自己に向き合う時間など何もしない時間も大事。大人向けの読書講座に、保育サービスも準備するなど、読書を楽しむ時間の確保が必要。
中山委員	月１回、意図的なメディアコントロールと、読書をセットにしている。「宿題無しの日」して、本を読む時間などを作っている。
竹内委員	家庭読書に求めるものが高すぎる。イメージの持たせ方に工夫が必要。
田中委員	目標値は１００％でよいのではないか。読書に、漫画も含めてよいと思うがどうか。
竹内委員	青少年自然の家に、図書コーナーがある。 数値が横ばいになると、指標自体を変える必要がある。
田中委員	試し読みシステムがあるとよい。
相良委員	ちょっとした隙間の時間に読書ができるよう、身近なところに本が置いてあるとよい。
田中委員	親子セットの良い面もある。
中山委員	職場の上司が、職員朝礼時に本を紹介してくれる。
大賀委員	薦められると読みたくなる。
福永委員	家庭内読書について、オーディオブックや文学作品の朗読番組（ラジオ）など、「読む」だけではなく「聞く」という形態も、読書の範疇に含めても良いのではないかと思う。視覚障がい者向けにはデイジー図書があり、コンテンツも充実している。
竹内委員長	家庭での読書量と子供の学力は、相関している。現在は「テーマをもって生活する」ことが難しくなっている。管理指標などの数値が現状維持なのは、推進していると解釈できる。維持していること自体が素晴らしい。すべての数値が上向きになることは難しい。 本を読むことは学習権の保障である。家庭で本が読めないことは、労働問題でもある。

B 班は、井澤委員、内瀬委員、小島委員、小坂委員、成合委員、森山委員、矢野委員、吉永委員。
生涯学習課職員 中村主幹、日高。

発言者	発　言　内　容
B班　協議１：読書バリアフリー計画に係る読書活動推進について　※進行：中村主幹	
内勢委員	現状はどうか?
中村	公立図書館の実態は把握しているが、学校の現状は把握できていない。
内勢委員	まずは学校に広めることが必要ではないか。
矢野委員	司書は、県立高校に配置されていて、支援学校にはいない。支援学校は、教諭が司書の役割をおこなっているが、授業もあり対応が難しい。明星支援学校には、当事者の教諭から、バリアフリーの情報が入りやすい。小中学校に司書はいるが、バリアフリーは周知されていない。まずは、意識の高低差を減らすための研修が必要。
小坂委員	県立学校の司書は、午前中のみの勤務。バリアフリー等はこれから。アクセシブルデザインは現在も、必要な生徒に対してテストなどで配慮。ニーズがあってからの対応。
井澤委員	勤務先の小学校４年生が、バリアフリーも含め福祉を調べ学習した。デジタルブックなども調べた。アクセシビリティは今後、児童一人ずつのタブレットを活用し、予算をかけずに対応できそう。学級担任の活用能力と理解度が今後の問題。その場での対応ではなく、小中高を見通した系統的な指導・活用が必要。

小島委員	えびの図書館は、デイジーなどの環境が整っている。家庭教育学級などで説明・紹介をしているが、浸透していないのが現状。
中村	障がい者向けサービスの情報が届くための手立ては?
吉永委員	障がいのある方向けの特別な対応ではなく、大活字本など高齢の方など多くの方に利用できるものとして対応。市町村で活用できるよう、大活字本のリストを配付。マイラインでの利用も可能。
小島委員	学校からの要望があれば、連携して貸し出すことを可能にすべき。
吉永委員	県立学校は現在、貸出できる。
中村	施設や事業所はどうか。
森山委員	ＰＴＡでは、コミュニティー･スクールなどの研修会をして。バリアフリー関連は行われていない。先進校や、モデルなどがあると理解が拡がりやすい。
中村	ＰＴＡからの広がりは非常に大きい。これからも連携していきたい。
小坂委員	高校は、一人一台の端末を個人負担で整備されている。デジタル図書も読書なのか整理できずに、紙の本しかダメという学校がある。
井澤委員	「電子図書はダメ」という考えこそが、「教育のバリアフリー」が必要な点である。
小島委員	えびの図書館は、デイジー図書なども貸出可能。人吉など広域に対応している。
矢野委員	デイジー図書を所蔵している図書館もあるが、数量や最新版が無いという状況。そのため、サピエ図書館が利用されている。それでも無い本は、視覚障がい者センターに依頼し、点字やデイジー化してもらっている。宮崎はボランティアが少ない。人材育成も必要。
中村	視覚障がい者センターで、ボランティア講座を実施しているが。
矢野委員	今後も、ボランティア育成は必要。宮崎は人数が少なく、他県に頼らざるを得ない状況。
成合委員	宮崎のボランティアのみで全てを望むことは難しい。他県から探すこともやむを得ない。
井澤委員	ボランティアは高齢化がいわれるが、スポーツ等は言われない。ボランティア人口を増やすために、幼少期に「人の役に立つことは価値のある仕事」であることを伝えるべき。
Ｂ班　協議２：生涯読書活動推進計画の具現化に向けて	
吉永委員	家庭における読書。③の指標は、家も入っているのか。①と③の内容が同じになるのでは。
森山委員	現在の数値だと、「６０」でもよいが、目的値だと「７０」が妥当か。
内勢委員	電子図書が普及しているが、どこまでを電子図書と見なすのか。Facebook はどうか。
矢野委員	①と③の指標で具体性が違いすぎる。①は漠然、③は具体的。
森山委員	具体的な取組について。ＰＴＡ総会資料等には「読書推進」の項目がある。
中村	県も読書サポーター養成研修会等を実施している。高校生などにも広めていきたい。
井澤委員	宮崎市は「家読」に取り組んでいる小学校が多い。ただ、中学校での取組は少ない。アンケート調査に中学生が入ると、数値がなかなか上がらない。
中村	現在、県民だれもが利用できる県庁文庫がある。これを県関係の施設等から広げたい。企業や子ども食堂など、例えば「ひなたライブラリー」の名称で広げたいと考えている。